



芸術文化のおもてなし 板東 浩

うわあー、素晴らしい！ 秋田に着き空港内に入ると、壁面は神々しくも秋田杉で作られていた。そして目に飛び込んでくるのは、参加する企画のポスターやのぼりの数々だ。

平成26年の秋、木々が美しく色づく秋田県では「第29回国民文化祭・あきた2014」が行われた。伝統芸能や音楽、舞踊・舞踏、文芸、美術など県内全25市町村で110の事業が開催。

空港や駅では、到着時間にあわせて民謡生唄ウエルカムミュージック。県外からの参加者は、呈茶席・迎え花で「秋田文化のおもてなし」を受ける。商業施設、商店街には店員が国文祭のバッジをつけ、各ホテルでも地域のイベント案内の掲示板がみられた。

徳島県のゆるキャラは「すだちくん」、秋田には「スギッチ」という秋田で、傍らにあるピアノを各自が自在に演奏。一緒に歌い、語りあい、親交を深める楽しく意義深い晩餐となった。

今年のピティナ・コンペティショングランミュージックYb部門で優勝したのが岡田昌士氏。東京大2年生で野球部に属し、守備はセカンド。大学時代の私と同じポジションということでも話も弾む。「東京大学ピアノの会」に所属し、部員200人としてしばしば演奏会を開いていると。私も徳島大学2年の時ピアノ愛好会（現・室内楽同好会）を引き継いだ共通の経験もあり、仕事と人生、音楽と芸術などを語りあった。

☆素晴らしきマンパワー

本企画は成功裏に終了し、関係者との交流会でその秘けつが判明。国文祭全体は畠山隆推進室長が、音楽企画の統括は若松マキ氏が担う。スタッフやボランティアは音楽関係者や市職員など企画運営を長年実践してきた方ば

わか杉国体から生まれたゆるキャラが活躍中だ。国文祭のポスター・チラシやグッズで、各企画に合わせた衣装やポーズでアピール。なんと「スギッチ」は県職員でさらに主任という肩書までもっているらしい。

美しい自然と四季の変化が織りなす風土の中で醸成され、守り育てられてきた文化が秋田には存在する。

国文祭のテーマは「発見×創造 もうひとつの秋田」。公式ガイドブックには、「文化を旅する」まだまだ知らないニッポンに会いに。文化に触れて、本当の豊かさに気付く旅」とある。

今回、私は全国のアマチュアピアノストから選抜され、21組が約4時間のコンサートを行う「あきた2014ピアノフェスティバル」アマチュアピアノストの祭典」に出演した。前半部の

かりだ。全国から参集したピアノストのニーズもよく理解下さり、打てばすぐ響くとは、まさにこのこと。報告・連絡・相談のタイミングもパーフェクト、さすがリズム感がよい。

さらに、当日ロビーでは、コーヒーや秋田銘菓が聴衆や参加者にふるまわれ、長時間にわたる演奏会が和やかに進行していた。以上のように、経験や目配り・気配り・心配りによって、成功に導かれたのである。

☆食文化も重要

イタリア人の人生観として、「マンジャーレ、カンターレ、アモーレ」が知られる。「食べて、歌って、愛するうちに終わる一生」と。人は生きていく上で、食することは欠かせない。

国文祭でも「食文化シンポジウム」が行われ、テーマは「きりたんぼ鍋」と「和食と伝統食と健康との関わり」。秋田の発酵文化として「麴カビ、しょつつ

最後に、ガーシユウイン作曲の「ラブソデー・イン・ブルー」を演奏。貴重な経験で感じたことを記したい。

☆共に出場した仲間

アマチュアはよく「素人」と訳されるが、本当は意味合いが異なる。語源はイタリア語のアモーレ（愛）に由来するため、「愛好者」が適切だろう。

プログラムで出場者の略歴をみて驚いた。アマチュアピアノストとのことだが、出演者は内外のコンクールで数々の入賞歴を有するなど、職業が音楽関係者ではない。だけの方々だ。

今回はフェスティバルで共に演奏し、文化の香りや芸術の哲学、音楽の魅力などを発信する「仲間」といえよう。懇親会でも、参加者のバラエティーに富む演奏はいずれも印象的

る（日本三大魚醤）、納豆、いぶりガツコ、ハタハタすし」が独特だ。

また、米・麴・水から作られる秋田の日本酒は秀逸である。秋田人には酒好きの遺伝子が脈々と受け継がれている様子で、「秋田の酒による乾杯を推進する条例」が面白い。美酒によって人脈や信頼、協調が広がり、芸術文化を展開していくだろう。

これからの食文化に対する企画は、近年、私が糖尿病専門医として糖質制限の研究や実践を行っていることもあり、大変興味のある企画でもあった。

現代人にとって、日々の生活であらためて文化や芸術をじっくりと感じる時間を持つのは、簡単ではないだろう。しかし、秋深まる山々や、季節感あふれる童謡などの音楽、食卓に並ぶ旬の食材などの存在によって、私たちは有意義で心豊かな文化の旅を続けることができるような気がする。